

座長報告

神戸高専 一瀬昌嗣

2011年6月に行われた、「福島県の土壤汚染調査報告」がテーマのセッション研究会1日目と2日目にあった。私は、1日目は座長の補佐(横に座っているだけ)、2日目は座長として司会をさせて頂いた。1日目は下浦享氏の「土壤中のガンマ線放出核種分析による福島周辺放射線マップ」、2日目は藤原守氏の「土壤中のガンマ線放出核種分析による福島周辺放射線マップ」の講演が行われた。私自身、この土壤調査に短いながら参加させて頂いたこともあり、関係諸氏のご苦勞は遠くから拝見していた。改めてご努力に敬意を表したい。私見として、惜しむらくは、実施時期が6月までずれ込んで、ヨウ素のマップが十分には描ききれなかったことがある。他機関で採られたデータを糾合することにより、これを補完できるのではとの意見が討論の際にあったが、今後の関係者の努力に期待したい。

下浦氏、藤原氏の講演を通じて印象に残ったのは、測定の実験の大きさや測定器の精度をいかに小さくするか、苦勞されていたということであった。土壤調査の際、一つの定点からサンプルを採る際に、5箇所を採ること、よく攪拌することの指示があったのを覚えているが、報告にあった測定結果を見るに、そのサンプル間での振れ幅も大きく、かつ、測定機関による差も結構大きく、クロスチェックをされるなど、測定に際しての努力があったことを知った。

また、藤原氏の報告の中には、川俣町山木屋での甲状腺スクリーニング調査も触れられていた。いわき市、川俣町、飯舘村の小児に対してされたこの調査の報告^{※1}をみると、0.2 $\mu\text{Sv/h}$ (1歳児の甲状腺被曝量100mSvに相当)のレベルを超える者はなく、99%は0.04 $\mu\text{Sv/h}$ 以下であったとのことである。他の独立で行われた調査^{※2}とも総合して考えると、甲状腺線量にすれば、チェルノブイリの1/100~1/1000の被曝量であったことは、不幸中の幸いといえる。ただし、健康被害の有無については、今後慎重に判断する必要がある。

2日目の最後の総合討論は、「放射線リスクと医療のクロスオーバー」というテーマで、座長は大塚孝治氏に務めて頂き、午後のセッションに関連した討議が行われた。最後に、事前に坂東昌子氏・真鍋勇一郎氏らと検討した沢田論文について^{※3}、背景となった遠距離被曝が過小評価されているとされる問題と、質問に対する、沢田昭二氏、今中哲二氏からの回答を紹介した。時間の都合上、討論の時間はあまり取れなかったが、Open questionとして諸賢の意見を頂く契機としたい^{※4}。沢田氏と今中氏には、質問に丁寧にご回答頂いたことに、この場を借りて謝意を表したい。

※1 原子力安全委員会の報告参照 <http://www.nsc.go.jp/enzen/shidai/genan2011/genan067/siryoi.pdf>
小児1080人の結果が報告されているが、山木屋地区の66人は、バックグラウンドが高かったことを理由に、この集計からは除外されている。

※2 鎌田七男氏のグループ、床次眞司氏のグループ、および高田純氏が、それぞれ独自に行った甲状腺線量の調査結果を公表されている。

※3 事前討論のページ参照 <http://jein.jp/nbp2012/pre-discussion.html>

※4 Twitterで若干の議論が行われた。現在もコメントを受付している。<http://togetter.com/li/355585>